



大すきいっぱい西北の子

～学びづくり、くらしづくり、仲間づくり～

令和6年12月3日
長崎市立西北小学校
文責：校長 江原芳樹
R6 第8号

12月になりました。

12月は、締めくくりをつけて、片付ける月、整理する月です。新しい一年に向け、意図して節目をつくる月です。

日照時間は詰まるだけ詰まり、昼は慌ただしく短く、夜は夜で身の縮む寒い風が吹き抜け、常に何か追われるような落ち着きなさがあります。けれども、その先急ぎするような気持ちの中で、息を整えてこの一年を振り返る時間をもちたいものです。

振り返ると良いことばかりではないことにも気付きます。例えば、子どもたちの成長には、常に新しい不安や心配事がつきものです。そうしたものも大きく含めて、子どもの成長の過程として見ていけるようになりたいと思います。

振り返りでの気づきが、新しい一年への展望となることを願って、今年一年を締めくくりたいと思います。

他人事ではない

子どもの SNS トラブルは大きな社会問題となっています。令和5年の総務省の調査では、6～12歳で自分のスマートフォンを持っている割合は42.6%にのぼっています。そのうち SNS を利用しているのは41.8%となっており、前年度の調査から5%増加しています。

西北小学校の子どもたちもおおよそ同じような傾向にあると考えています。休日にスマートフォンを手にしてしている子どもは、今はもう珍しくはありません。

表題の「他人事ではない」というのは、子どもの SNS トラブルのことです。

西北小学校を含め、長崎市北部の近隣校で実際に起こった事案を紹介します。

【事案1】

小学校3年生の女児がスマートフォンを手に入れました。自分でアカウントをつくり、SNS を始めたところ、同級生という女の子から連絡がありました。はじめは、何気ない同級生ならではの会話が続いたようですが、親しくなった頃、「お互いの写真を送り合おう。」となりました。もちろん、相手も写真を送ってくるので信頼してしまうのですが、そのうち「体の写真も」「裸の写真も…」とエスカレートしていきました。3年女児は、これまでの流れの中であまり違和感もなく応じていたようです。

この相手は、成人男性です。3年生の女の子になりすまして近付いていのです。夜遅くに連絡をしあう様子に保護者が気づき、スマートフォンを確認し、関係機関へ相談したことから、大きな被害にはなりませんでした。

【事例2】

高学年の男児も自分のスマートフォンを持っていました。学校には持っていきませんが、休みの日はいつも手にして、友達と遊びに行くときも離しません。その男児の検索履歴には、「人の殺し方」「友達の殺し方」などがありました。その男児がどういう目

的でそうした検索をしたのかは分かりませんが、それを目にした友達は大きな不安を感じるようになりました。

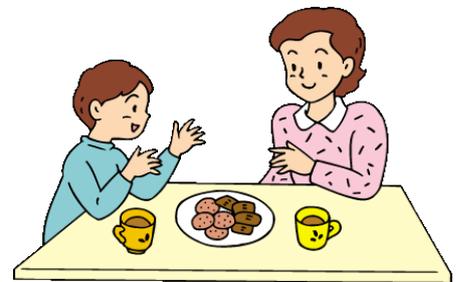
これらの事案は、私たちのすぐそばで起こっているものです。

ネット依存症の子どもたちを対応している方と話をすることがありました。話題は「子どもにスマートフォンをいつ持たせるか。」です。これからの社会を生きる子どもたちにはおそらく不可欠なものです。とは言え、安易に持たせることには保護者として大きな不安があります。

答えは明確でした。

「スマートフォンを与えるのではなく、貸与という形で持たせることです。貸与ですから、約束を破ったり、使い方が悪かったりしたら、『返してもらう』ということになります。また、所有者は親ですから、時々スマートフォンをチェックするのも親に権限があります。もちろん、持たせるときにそうした話をしておくことも大切ですし、一緒に使い方を勉強する機会をもつことも大切です。」

今、子どもにスマートフォンを持たせている方は、子どもの使い方等をどれくらい承知していますか？安全に楽しく使えるように、私たち大人がサポートしていかなければならないと思います。この一年の振り返りとして、その使い方について子どもと話してみませんか。



《校長散歩道 No. 18》

アイオワ州立大学のジェンタイルらの研究に、「他人の幸せを願うと自分も幸せになる」というものがあるそうです。方法は次のようなものです。

500人弱の学生を4つのグループに分け、大学構内を歩いてもらい、すれ違う人に対して、心の中で“あること”を考えるよう伝えました。グループ①は「その人が幸せなってほしいと優しい気持ちを抱く」、グループ②は「その人と自分にはどんな共通点がありそうか考えてみる」、グループ③は「その人より自分の方が優れていそうな点はどこかを考える」、グループ④は「その人の服装や持ち物について考察をする」というものです。

このように4つの考え方もつグループに分けて実験を行い、散歩の前後に不安、幸福度、ストレス、共感性、他者とのつながりなどの要素をスコア化していきました。

その結果、グループ①が最も幸福度が高く、不安が減少し、共感性や他者とのつながりにおいてもプラスの作用が働いていたそうです。おもしろいのは、個人差が実験結果にほとんど影響を与えていなかったことです。性格の異なる人でも同様の効果が認められました。

どうしてこうした効果が生まれたのか、ですが、他者の幸せを願うことで自己肯定感が高まるからというのです。他者を認めることのできる自分への気づきが、結果自身の幸福感へとつながるのです。家族や友達の幸せは誰もが願っているものです。それを意識する生活をしたいものだと思います。